

Ghent Pathology 2025 滞在記（英国病理学会派遣報告書）

神戸大学医学部附属病院 病理診断科 神保直江

私は、2025年6月24日から26日まで、ベルギーのGhentで開催されたGhent Pathology 2025に参加させていただきました。6月のベルギーは雨が多いようですが、滞在期間中は天気恵まれ、過ごしやすい気候の中、有意義な経験をさせていただきました。

1. 学会について

日本病理学会総会と同様に、基調講演、一般口演、スライドセミナー、ポスター発表などが開催され、一般演題は臓器別で進行していました。基調講演では、研究と診療、多様な臓器にまたがる多岐な内容で、発表者も学生から教授クラスまで様々で、大変興味深く拝聴しました。若い学部学生が大規模研究を任せ発表している姿に、年齢や立場を問わずチャンスが開かれていることを実感しました。私は6月26日のOral Free Presentationセッションにて、“The Impact of Immunostaining-based Molecular Classification on the Diagnosis of Pulmonary Neuroendocrine Carcinoma”というタイトルで発表させていただきました。肺神経内分泌癌の病理診断の課題が、近年の分子分類の視点からどのように理解・説明できるかという内容です。座長のMeng-Lay Lin先生とStephanie Craig先生、さらに会場の先生1名から質問をいただきました。椅子に座ったまま質問するスタイルが一般的で、距離があったため質問が聞き取りづらく焦りましたが、丁寧に聞き返すことで無事に対応できました。Meng-Lay Lin先生とは、その後のcoffee breakでも話すことができ、有意義な時間となりました。

学会の雰囲気としては、まず女性の参加者が多く、服装も個性豊かで華やかでした。学会の中核を担う委員にも若手の先生や女性の先生方が多くいらっしゃるものが印象的でした。また、学会中のコーヒブレイクも文化として定着しており、休憩後にはコーヒーやワインを片手に会場へ駆け込む姿がよく見られました。会期中はCommittee Dinner, Welcome Drink Dinner, Conference Dinnerと各日のディナーに招待して頂き、更に2日目にはイギリスのグループの食事会にも参加させていただきました。パーティーやディナー中にはスマホを触れず、会話に集中する様子が印象的でした。

2. 学会以外の活動

6月24日には小無田美菜先生のご配慮により、ベルギー最大の大学であるKU Leuvenを訪問し、最新の研究施設や体制を見学しました。In-houseでの分子診断、病理標本の完全デジタル化、臓器別診断の徹底など、ベルギーの人口は日本の約1/10と小規模ながら、大学・医療・研究が高度に集約され、連携している印象を強く受けました。Olivier Govaere先生の研究室では、大学院生3名の研究発表を拝聴する機会があり、それぞれが1年間でハイインパクトの雑誌に貢献していると知り、規模の大きさを実感しました。翌25日には、学会会場近くのSint Lucas病院も見学させていただき、ベルギーでは日常診療に次世代シーケンシングが一般的に使用されていることに大変感銘を受けました。

その他、周知の事実ですが、物価は日本の 2.5 倍ほどで、トラムの 1 区間の運賃が 3€（約 510 円）と高額でした。生活面では、歴史的建造物が立ち並ぶ中で電子化が高度に進んでおり、非常に便利だと感じました。

3. 自分の気づき

私は小学生と保育園児の子どもを育てながら病理診断と研究を続けています。これまで留学経験がなく、海外での学術活動は自分には遠い存在と感じていましたので、派遣が決まった当初は期待より不安が大きかったのが正直なところです。しかし、現地に足を運んでみると、学び続ける楽しさと、人と仕事に向き合う情熱を改めて実感することができました。英語は得意ではありませんでしたが、英国やベルギーの先生方が私の英語を理解しようと根気強く耳を傾けてくださったことに深く感動しました。最終日には学会場で知り合った先生方がわざわざ私たちの発表を聴きに来てくださり、大変感激しました。今回の滞在を通じて、「小さな子どもがいると海外に挑戦できない」という思い込みが自分自身の中にあったことに気づきました。子育て中含め、さまざまな立場の人が機会を得て活かせる環境こそが、国際性と多様性を支える基盤であると改めて感じております。

複数の幸運が重なって、今回の派遣が実現しました。最後になりますが、英国病理学会派遣をご選考くださった日本病理学会国際交流委員長の都築先生をはじめ、関係各委員会の先生方、日本病理学会事務局の皆さまに心より感謝申し上げます。また、派遣前から派遣中まで様々なサポートと企画をくださった小無田美菜先生に、心より深く感謝申し上げます。現地でさりげなくフォローしてくださったり、研究者としての視点を多く教えてくださった小林信先生にも、心から感謝いたします。



(左)発表前の 1 枚 (中央) Ghent の町並みを背景に小無田先生、小林先生と筆者。(右) Committee Dinner での 1 枚。